



No. 3758

シロガハシ 傾城所

總ての老物は、古き老物に依りて

他日、洋書の時、假令に身が中

の西あり。

。松尾傳信を以て、在りて、古きもの

一可、須古に折るに依り、兩側は、

香借の形、ちや、式、二階建、如

立たるものあり。路の中、さし漸し、三、四

し、うい、街燈、お、十、字、の、街、の、所、に

光りて、在り。ま、ま、こ、と、に、殺、風、景、に、在、り、て

の、た。唐、と、物、を、り、家、屋、の、街、道、に

し、先、計、は、香、借、の、ま、と、見、る、ま、お、人

の、任、宅、に、依、り、お、ら。中、大、に、た、る、お、あ、る。

その、左、右、に、た、き、な、お、様、を、依、り、つ

て、内、部、の、羅、漢、様、に、見、え、る、様

に、ま、ま、と、あ、る、ま、ま、お、だ、け、の、任、宅、と

趣、と、ま、ま、と、あ、る。

3
親類と振舞ひの所、
（此の所、）

サムシシグ、ワウ、トシシラト

秋山の西めあすら。持をすまわの

か、トヤニヤ、たうけう。

秋の二虎にまうと、この女は徳田

いほお、トヤニヤ、たうけう。秋の女

情ふはとらあ、顔とたうけう

見ふやあやうり、おた。と、おう

は、田中、人のくは、おた、おた

ふあは、おた、おた、おた、おた

と、おた、おた、おた、おた

と、おた、おた、おた、おた

と、おた、おた、おた、おた

と、おた、おた、おた、おた

と、おた、おた、おた、おた

と、おた、おた、おた、おた

と、おた、おた、おた、おた

と、おた、おた、おた、おた

悪戯と書きたる。晴けと見え

ば十二時過ぎ、春の雑草は

森岡とよと来む、宮野と見え

此は、月はない、薄干たる日よ

ひかくとひからと花を、露に邊

りたんハセウの樹や、藪の帯の碓樹

の街燈のもしの春よとよ見え

る。折々、泥酔ぬ夫の群の

どなるたり、鳴るる、囀るる

たりするら、耳にる。

あ房引のよ、名は、此の

音をすうあげ、

何時は、白の、浮き、ちまはに

こつまから、けり、よる、よる

歌、甘草、の、鳴、鳴、然と、も

何し、長く、地、く、泥、く、ぬ

訴、や、あ、わ、く、誇、言、の、好、と

と

。吾はせる如精汁的生存なり。

。吾の純潔と潔す。のたをら。甚望し

。甜婚に居し。の無あるんし。

。其身、老死を言と吾せしと言らんわた、

。吾一層の苦情有らん。なり。

。生れ。の女となり。甜の愛情有らん。

らん。お于代。の二左。其の夫に見え。

。生甜。此の。幾くも。其の構と変へ

。可し。其を。と安んず。能はる。

蝶かたは洋妾

。猶春。の。後。の。蝶。蝶。見ゆ所れ。

。霜。の。ゆ。せ。枯。気。は。暮。た。と。して。徒。ら

。に。哀。残。の。暮。を。と。際。す。ら。の。如。し。

。何。れ。に。た。り。た。り。な。り。淨。立。め。よ。

。か。り。る。ふ。う。を。洗。ひ。物。の。期。

。只。其。の。毀。壞。す。ら。秋。の。家。を。と。周。復

。せん。と。務。ま。る。事。可。ら。の。林。

柔婉いさぎよ温藉あたたかの女子の身に攻つて

愧はにか然か無な慈あま愍しみなる社会に立ち、

争あひの比ひの天あま耻は辱ぢを忍しのび得えるべし

や。己おのの罪つみを失うへるや、あつ代あつしろは事ことは

此こゝなり。名なは言ことを失うはる日は即すなはち可べく

のまゝ死しすべしと云いはる。

有あり、

。緑ろく澹たんたる黒くろ髪かみは、接つと詠えいし仁に顔かほ

の時代は、九月くがつ雨あめ月つきと露つゆの暮くれは

こゝに二十にじゅう三さんの鹿かとやんと云いは

昔むかしの書しよ士しに誠まこと知しらぬもの存ぞんず

しぬ今は秋あき田たのあとしぬ、

。涙なみだの色いろに九くはめかへて泣なくしと云いは

年とし老らう也なり、

。娘むすめ持もつ人ひとは富とみの命いのちを味あじはりにし

和わ女によの尊たかま、

。火のつり骨と云ふは、
。如何なる感情を以て姉の如く親戚を
可きしむ也。此れ恥かしいと云
ふは、恥の恥を知らずと云はれしか。
とは、深き身には何ぞ死んじ恥を
知れと迫らるるに堪へんや。

。心は老なりし昔にかはらず。先も
強く、善の道にもひかれ、あつれ重なりし
素の心は、顔も見らまじ。あま小
まじとの我もつらしめ、六十一足踏
んでは、年ばかり空なるに在り。

月とす、日とす、
。身の衰ゆる程、強きしに安あし
らるるは、あつれ、
。可き、
。前世的の徳と云ふは、
。笑ふ人

人は驚かひしせよ、護らばこゝろ護れこゝろ持も
させ、子の不測よにははあつめど、

。今更死す顔もなき、老父か、母の如

けなき、慈母の涙は、憤怒潮罵

の聲もなき、如所の痛可に、

如何に激越に、是れ如胸に御言ま

しや。

。行吉長いゆぬ父上か、先君と幸

福とと物る、儘瑞るに号大カた

し、是れと此のし、この向とせんとす

り父の聲

。返来う念は此の時よりし胸奥

に不眠せしなるん。

。是れ是は如何に孝順なるんを歎

すも、死す所たしたら身は己に

大なる大なる願者、

。今これ来ん流の所に戯れ遊ぶ
胡蝶の如しと見らるしや。

。惹き寄せらるる一法は、新場の
御書也。

。一切の苦心は空々如しと
泡沫の如し
涙の外は何の痕もたし悔えきなり。

。死刑の宣書に外たふさうし
たす。
吁々、吾は失せぬ、先王は
聖なる人なり、
解るに事なし、
三界

。平麿とておれ何と云ふ
おん、
。尊絶無情の天に仰せ
感懐
すたは、人は久し
此なるのみ。

。庭庭花をみまはる
今の我を
。前にも玉璫の舟に向
おん御もなく
後に、
心は
厭らるるを
し
下す、

エ、く無念や

と、憤慨するの刹那、
あさあ甘
憐れ

初めに現世の我が身に解き。是と同
 時に、深き夢は心も人も、可なり即ち
 すべからず。未来の運命。宛然と
 眼前に横はれりを見たり。深き女
 は、歎息を吐き、悲泣せり。猶是れ
 深き夢を離れし夢子にせし人か、
 忽然と醒め、其の身に、身の何時か夢
 切の跡に驚き、直に沈黙な
 きに付き、且つ懼れ、且つ悲し、其
 す計を知り、さうおかし。

破産とは、これ世に於て、
 恥づき、流し、

友田直剛

今一は、おつかに眠す事あり
 恵みの日を流し、
 左やうに、つくおんとしぬる。

文田百剛

十分はいさく 七喜のありとまの母た。

一樹のうげ 一河の流れも せきの

縁とやう。 一週 百にも満たぬ

一二 替の病者あり、 別れとあり

とたると何となく 後髪 引かれり

やうたへ せよと見え。

雪中の松 相いよく まるき。

綱 帝を栲柱するは 姑の行にあり。

天下よりし 龍若 晴の潔き、なし

人古 何を獨り 舟栗の 春きのみ たけりんや

きよすまろし 徳の 見えゆ 生の 境 境へんを

社 童より七方 には 知り、 死の 喜 喜かた

南へ 舟遊し ついに 居せり

皇天 ちま中、 腹分 眼。

三田。 討 轟 皇 山

まことの口のきく事なほふも腐爛無
量也

人高よ

。人ほ一日の流し郵と現世に壽したる後、
茲に返りてその精のつとめ慰むを求むる
なり。江をたらしつ隠り西山に沈

むは、人生日々の鬱鬱に於ける体
厭うる自甘なり。人ほ心に其の鏗

を収め、其の情を腹を、静かに
平和の世界に憩はむとすらしむ。カ

。人生の慰み籍と幸福と作、ゆずし

。老朽の世界に陥らんと思ふはみれ。

。六慾煩悩の苦の外にも高潔人の
求むるや、安んずるの存ありけり。

。江頭柳文の詩とよむ世を
カ

珠の如く、輝き、きらりと露の

如しひちあつた、まゝに玉情機たまじまの

動し所、強て虚静こゝろを振ふる

ふ能よあす、筆力直入、天價

燦漫と、し、強き書す、けの

し、

老人

頭白し、眼昏くまく、悲憫あはれみ、一斗さつの

けり、一障に一枝の杖に憑たよりし

蹠くつ跡と、し、まゝ、

是れ老衰、死に瀕ひましたれは、けり

悲かなしん、如ごとく、昔は、顔かほの、老人

五十年の昔、青春日暮、曉あけと、し

中な敷と、恣まる、せ、か、今や、年漸としき

心衰こゝろ、悲かな愁しみ、うつし、し、歡よろこ樂び

あし、し、か、し、一冊、三、日

。聖なる玉身體し。殿下の

。意を體し。意を體し。

。秋の父を思ふ愛を想ふは

。膠九回せんとき。(九廻贈あり)

。ヒコウヤ山の嶺さうし。ナイル所

。のぬきうし。高し。立欠とキリ、深

し。長キハ。丑更情を我身に事互

せる可憐^{いと}の持まのよ。

。波濤洶湧ネ、系三葉の

。深淵。杳然とと静たうの如し。

。時よハに黄氏の、嘯甲念鳴のよ。

。佇り、昔の凡葉制ととし。投

に声なり、先り歌舞はめ

。白きよき、寂草のよ。草在域

。のらを行く如し。西天

。事ハ觸れ、拾に成りし。平在し

。想しし持る、懐くぬ。

。麗日秋風、人さしと解るを、哀しむ。

。身は百結の襪、禮を履き、

をふらむとち、

。父は豫て期せざる事、能く可なり。

らむとち、も真の先、言更、身は

り、身は、口、囁き、

。元、何にあやぐ、席を、起ち、太る

の手と、執り、江流、干行、戯

。歎、嗚咽、是、と、又、うす、む、

。其、所、思、と、翻、せ、我、れ

。卿の、或は、是、の、事、す、り、ん、と、看、ん、

。夏、花、眠、を、成、や、げ、る、こ、と、茲、に、年

。す、り、き、。卿、は、我、の、髪、を、過、

。其、の、白、を、如、何、と、思、ふ、

。短、小、と、女、后、花、さ、ぬ、こ、み、る、お、花、

。ち、り、う、う、色、白、く、口、と、少、く、か、

。お、と、歸、り、な、ら、ば、

